

# 平成30年度学校自己評価システムシート (県立浦和高等学校)

目指す学校像	尚文昌武の理念のもと、時代の求めるリーダーの育成を目指す。
--------	-------------------------------

重点目標	1 互いの信頼関係のもと、自走する生徒集団づくりをとおして、目指す学校像の実現に取り組む。 2 生徒に、第一志望はゆずらない、との強い信念を持たせ、全ての職員が授業改善と生徒一人一人の進路実現に取り組む。 3 保護者・県民に対する情報提供をとおして、開かれた学校づくりを推進するとともに、浦和高校の良さを積極的に発信する。
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	2名
	生徒	3名
	事務局(教職員)	9名

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。  
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学 校 自 己 評 価						
年 度 目 標				年 度 評 価 ( 3 月 6 日 現 在 )		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度
1	各年次において「守・破・離」の理念を意識した指導が行われている。 生徒が自分自身の管理(マネジメント)を行い、集団で協力・協働することにより、主体性が最大限伸びるような指導を行う必要がある。	主体性をもって自走する生徒集団づくりをとおしたリーダー育成の推進	ア 自分・時間・モノの管理をとおして、浦高生としての主体的に取り組む姿勢を身に付ける。 イ ホームルーム会長を中心に集団としての力を養い、主体的に学び・支えあう集団を形成させる。 ウ 励まし合い、切磋琢磨し合う生徒集団を主体的に行動する集団へと進化させ、個々の人間的成長を促す。	ア 自主的に自己管理を行い主体的に取り組んだという回答が75%を超える。 イ ホームルームが協力して主体的に取り組めたという回答が75%を超える。 ウ 卒業生アンケートで浦高生活をとおした人間的成長を感じた生徒が75%を超える。	ア 授業への主体性、部活動や委員会活動への主体性、行事への主体性は81%であった。 イ ホームルームとしての主体性は78%であった。クラスや部活動の仲間と協力できたという回答も88%であった。 ウ 人間的に成長したという点について、卒業生アンケートによる結果は92%であった。(4月10日)	A
2	以下の観点による授業改革及び教員の経験の蓄積・共有を更に推進する必要がある。 ① 生徒の主体的な学習態度の醸成 ② 基礎基本の早期定着と、書く力・考える力・伝える力の育成 ③ 主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善 ④ 大学入学後までも見据えた授業内容の高度化 ⑤ SGHの趣旨をふまえ、グローバル化社会を視野に入れた志の育成  併せて、多くの生徒が目指す国立大学進学を現役で実現させるための学習指導・進路指導が必要である。	(1) 主体的な学習を促す授業改善の推進	ア 主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善の取り組みを組織的に実施し、教員一人ひとりの授業に反映させる。 イ 生徒の主体的な学習を促すための、生徒による授業評価アンケートを実施し、各教科(科目)による検討会を行い授業改善に生かす。 ウ 生徒の書く力・考える力・伝える力を育成する方策や評価の視点を各教科で検討し、教職員全体で共有する。	ア 授業公開・研修会にすべての教員が参加し、自身の授業で実践を行う。 イ 教科(科目)毎に作成した授業評価アンケートを年1回以上実施し、各教科(科目)でまとめ、授業に主体的に取り組めたという回答が75%を超える。 ウ 研修会等をとおして教職員全体で共有を行い、生徒が授業評価アンケートで書く力・考える力・伝える力が伸びたという回答が75%を超える。	ア 授業公開(6月と11月)、研修会(4月と1月)にのべ108名の教員が参加した。 イ 授業評価アンケートは各教科(科目)において、主に年度末に行われ、授業に主体的に取り組めたという回答が83%であった。 ウ 研修会では東京大学・濱中淳子教授、上越教育大学・西川純教授を招いた。授業評価アンケートで書く力・考える力・伝える力が伸びたという回答が82%であった。	A
		(2) 高い志を育成し、進路実現を支援する取組の推進	ア 講演会及び高大連携事業等の充実 イ 生徒の高い志を支援し、進路実現に向けた積極的な行動や挑戦する姿勢を促すための通信を発行および企画の実施 ウ 日々の授業で培った基礎を確認し、考える力を伸ばす企画の実施、学び合い互いに高め合う集団の形成を促す行事の実施 エ 自己を見つめ将来を考えるプログラムの実施 オ SGH事業として行うプログラムの内容の充実と、生徒・保護者・地域に向けた成果の普及を図る。	ア 第一線で活躍されている講師を招いての講演会、東大との連携プログラム及び医師体験を実施する。 イ 各年次で年12号以上の進路だよりを発行し、OB受験体験講話、大学見学会を実施する。 ウ センタートライアル、入試問題研究会を実施する。 エ 学部・学科研修会を早期に実施する。キャリア教育を実施する。 オ SGHに係る報告会の実施と、SGH論文集を刊行する。SGH通信を発行する。	ア 進路講演会ではオックスフォード大学・荻谷剛彦教授による講演「大学で学ぶ世界で学ぶ」を行った。順天堂医院の協力の下医師体験を実施し3年生3名が参加した。 イ 3年次23号、2年次16号、1年次13号の「進路だより」をプリント及びWebで発行した。情報の共有と進路意識の高揚を図った。 ウ 2年次でセンタートライアルと入試問題研究会、1年次で共通テスト基礎演習を実施した。1年次英語力育成プログラムを実施。77名の参加があった。 エ 1年次は5月に学部学科研究を実施し、グループ毎に発表をした。2年次はキャリア教育として夏季休業中にOB訪問を実施し、300名が参加した。 オ 9月にSGH中間報告会、2月にSGH総合報告会を実施した。3月に論文集を発刊し、SGH通信は4号発行した。	A
3	HPや教育活動説明会、土曜公開授業などを通じて情報発信を行ってきた。本校の様々な取組や成果について、より積極的に情報を発信することにより、小中学生の保護者をはじめとする県民のニーズに応える必要がある。	積極的な情報提供による開かれた学校づくりの推進	ア 全教職員による組織的・計画的な広報活動の展開 イ 教育活動説明会、土曜公開授業の実施 ウ 小学生とその保護者対象行事の実施、小学生の動向分析 エ HP、学校情報提供の機会を積極的に活用	ア 広報委員会主催の行事に全教職員が協力できる体制を作る イ 本校主催の学校説明会(教育活動説明会、土曜公開授業)にのべ3000人が参加する ウ 小学生対象教室、小学生保護者説明会を実施し、それぞれに30校以上の小学校から参加し、アンケートを実施する。 エ HPの新規アクセス20万件、本校主催以外の説明会等に参加	ア 積極的に全職員への協力を呼びかけ、広報委員会主催行事に半数以上の教員が協力した。 イ 教育活動説明会は1474名(2回の計)、土曜公開授業は1183名(7回の計)が参加した。 ウ 小学生対象教室は118校から364名の小学生が、小学生保護者対象講演会と小学生保護者説明会は76校428名の保護者が参加した。また各行事でアンケートを実施した。 エ HP新規アクセス904,069回(2月5日現在)、更新回数354回であった。さいたまスーパーアリーナでの進学フェアや塾主催の学校説明会に参加した。	A

学校関係者評価
実施日 平成31年3月9日
学校関係者からの意見・要望・評価等
<p>生徒が個々で活動するだけでなく、浦高生の集団力を生かして、浦和高校の教育を発展させることが大切である。学校からの部活動の方針の提案は、生徒の主体性を成長させる貴重なチャンスである。浦和高校の教育をより進化させてほしい。(4月10日)</p> <p>様々な取組を行っていることは素晴らしい。ただ、主体的・対話的で深い学びとは何なのか、もっと具体性を持った改善策が検討され、提示されることをお願いしたい。例えば、改善策の中に示した『他者評価』についてどのようなツールを使って行うのか、プリントを作成したりする必要があるのか、しっかりと計画を立てて臨むことで、さらなる向上を目指していただきたい。</p> <p>様々な進路面に関する取組がある中、意識や意欲の向上をどのように評価するのがわかりづらい気がする。例えば、順天堂での医師体験3名というのは医学部志望者の全体から見れば少ないのではないだろうか。しかし実際は、全国から18名しか参加できない中で同一校から3名も参加しているのだから、素晴らしい機会に恵まれたことは間違いないだろう。また、英語力育成プログラムについても定員に対して2倍もの参加申込みがあり、運営の工夫によりすべて受け入れたのだから、これもよくできたと言える。これら、想定を上回っていることが、意識や意欲向上の見えるかではないかと思う。</p>
<p>広報委員会の主催する行事は、全教員で話し合いの下で行われているなら、全員行ったと言えるのではないかと。先生方で意見を出し合い活発な活動にしていってほしい。</p> <p>小学生対象教室については部活動の活動方針との兼ね合いが心配である。開かれた学校づくりと浦高の持つ良さを発信ばかりに目を取られるのではなく、活動方針の策定を振り返りの機会として、よりよい広報活動の取組としていってほしい。</p>